

貴志康一／勢勇克男／政岡重三／朝日会館の壁画／絵葉書・双眼写真

戦後：記録映画を見る会／草月アートセンターの企画巡回／小松辰男と現代劇場／シ・ドキュメンタリー・フィルム／美術家の映像、「映像表現」／京都府フィルム・ライブラリー／多彩な自主上映運動の開始／京都における映像教育

一つの参考事例がある。福岡市美術館が開催した「福岡映像史」である(1992年11月3日～12月6日)。「福岡市という土壌が映画・映像をひとつの文化として育み、位置づけてきた」と言う認識に立ち、5週に渡り「福岡映像前史」、「福岡のテレビ・ドキュメンタリー」、「福岡市出身・ゆかりの映画監督」、「福岡8ミリ映画の系譜」、「福岡の自主映画運動」の枠組みで多数の作品が上映され、同名のカatalogも発行された。昨今のように美術家がその表現手段として映像を活用する状況の到来以前ではあるが、地域と広い意味での映像とのつながりを通時的に捉える優れた企画であった。この小文、「メディア都市京都」の先行的な試みとして評価したいと考える。

【註 5】京都新聞社編「京都の映画 80年の歩み」(京都新聞社／1980年)。あるいは、先の【註 2】に挙げた神明浩&京都キネマ探偵団編「京都映画図録——日本映画は京都から始まった」(フィルムアート社／1994年)、加藤幹郎「映画館と観客の文化史」(中公新書／2006年)。

【註 6】テレビ・ドキュメンタリーには、最近ようやく全国的にその仕事が知られてきた。RKB毎日放送の木村文夫の作品が含まれていた。また、8ミリ映画の系譜とは正にアマチュア映画作家と大学映画研究会の活躍に焦点を当てたものであった。自主映画運動の文脈で、「フィルム・メーカーズ・フィールド」や九州芸術工科大学を拠点とした個人的／実験的映像制作が紹介された。



EXHIBITION & VIDEO SHOWING REPORT

LEADY

2015年9月1日(火)～6日(日)
第3弾!! 京都精華大学映像コースの在校生・卒業生の女子による有志上映会
出演作家
治井さくら／込山愛里／神尾末歩／マスマユキ
岩崎圭／ササキマイコ／くらたてさへ／早川輝
まろちゃん／ナカムラリナ／すわみずほ
●ゲスト作家
佐藤純美／中田愛美／内藤日和／藤沢菜穂
金子沙彩

澳門當下未來影展 京都上映

会期：2015年9月19日(土)
マカオ當下未來影展のセレクト作品を上映
日本・台湾・澳門の個人制作映像交流の今後へつなく、特別公開無料試写。
主催：未来電影日+VIDEO PARTY KYOTO

ANIMATION BANQUET

呑んで、語らう自主制作アニメの上映会第2弾

2015年10月10日(土)～11日(日)
作り手と観客とが気軽に交流できる「ANIMATION BANQUET」=「アニメの宴」という名の上映会。
インディペンデントなアニメ作品の裾野が広がる。
主催・運営：スタジオクロノ／中西亮介
http://studio-chrono.com/banquet/

Lumen Cinematheque Vol.1
かななかのぶひろ 映像個展
2015年9月11日(金)～13日(日)
日本の実験映画の草創期的存在
主催：Lumen gallery

Lumen gallery の企画展のひとつ、映像作家個展が始まった。Lumen Cinematheque という括りで、知己を得た作家を有名無名・老若男女問わずとにかく、個人映像作家を紹介し続けようという試みである。
櫻井 篤史 (Lumen gallery プログラムディレクター)

Vol.001 は、かななかのぶひろ氏。(2015.09.11～13) 同氏は、日本における実験映画の系譜の中で、特に継承・発展に寄与された特筆すべき作家で、現在に至るまで日本の実験映画シーンを牽引するイメージフォーラム創始者のひとりでもある。当ギャラリーのシネマテーク第一回として相応しい作家としてお願いした。初期の実験性が高い短編から、最近のビデオ記録をベースにした友人・知己、そして自身のプライベートな事情を丹念に捉えていく作風の中編まで、18作品をオリジナルフォーマットで上映する事ができた。



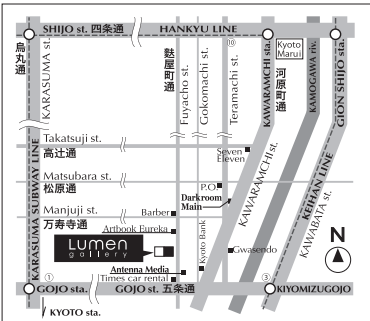
Schedule

■「サヴァイヴァル8」

2回目の開催となる8ミリフィルム作品上映会
11月11日(金) 19:00～、20:30～
11月12日(土) 17:00～、18:30～、20:00～
11月13日(日) 15:00～、17:00～、18:30～
料金：¥1,000 (一部無料)
主催：メタフィルム・サーヴェラス / MFM (Meta Film Marvelous)
フィルム・メーカーズ・フィールド / FMF (Film Makers Field)

■KINO-VISION 2016

(旧称・京都メディアアート週間)
国内の様々な映像作品をセレクト上映!
11月18日(金)～20日(日)
料金：入場無料
主催：KINO-VISION
共催：日本映像学会映像表現研究会、IOAF実行委員会+日本アニメーション学会&アニメーション協会
協力：京都精華大学芸術学部映像コース、VIDEO PARTY



■相内啓司 展

映像+インスタレーション Lumen&Main 同時開催!
Lumen Cinematheque Vol.7
イメージへの回帰 Return to Image (Lumen gallery)
重力の光景 Aspect of Gravity (gallery Main)
11月24日(木)～12月4日(日)
13:00～19:30 (最終日は18:00)
料金：¥1,000 (1プロ)、2,500 (3プロ)、3,500 (全プロ)
(インスタレーションは無料、作業トークは一部無料)



Lumen gallery

www.lumen-gallery.com
info@lumen-gallery.com
090-1144-4746
090-1158-8238
090-8448-9737

〒600-8059 京都市下京区越屋町通五条上る下錦形町543 有隣文化会館2F
Yuurin BunkaKaikan 2F, Shimourukogata-cho 543, Shimogyo-ku, Kyoto 600-8059 Japan
●阪急京都線「河原町」駅10番出口より寺町道を南へ徒歩約10分
●京阪電車「清水五条」駅3番出口より西へ徒歩約5分
●京都市営地下鉄烏丸線「五条」駅1番出口より東へ徒歩約7分
●京都市バス「河原町五条」バス停より徒歩約2分



VOL.3 issue 2016.10.25

メディア都市京都 第3回 - 歴史的な粗摺 -

森下 明彦

映画館での上映というこれまでの主流な方式とともに、DVD、あるいは、YouTube (ユーチューブ) の映像の個人視聴が勢いを得ている現在、映画の源流をどこに求めるかの議論もまた再開しているように思われる。映写方式においては、一人の覗き見のエディソンのキネトグラフ的な映像との向き合い方が原点であると言う主張も当然成立するし、説得力を持つであろう。ちなみに映画の日(12月1日)制定の根拠となっているのは、このキネトグラフの最初の公開が神戸の神港倶楽部において、1896(明治29)年11月25日から12月1日まで行われたことである(その前の17日に小松殿下に見せた、などの記録もある)。制定の時点で主流であったのは映画館で多数の観客が見るという方式であった。上述の現在の状況を知る由もなかったのである。同様なことは神戸市のメリケンパークに置かれた「外国映画上陸第一歩」を記念したモニュメントについても指摘出来る。大きな石を穿ち、スクリーンに見立た「メリケンシアター」という題名のこのモニュメントは、山口牧生ほかが結成していた「環境造形Q」が制作した(1987年)。彼らの「映画」に託した想いを斟酌出来るにしても、やはり違和感を感じる。本稿は、映像との接し方が過去も現在も多様であったと言う立場に立脚して書き進めたい。これまで多くの研究がなされ、その姿が定着してきている映画都市としての京都について、この場で追加す

ることはほとんどない【註 5】。簡単にまとめておきたい。この国で最初の映画撮影所は1908(明治41)年、吉沢商会が東京は目黒に建てたものであるが、京都では少し遅れて1910(明治43)年、二条城の隣に横田商会の撮影所が設立された。ここで活躍したのが牧野省三である。その後、変遷を重ねて日活の大將軍撮影所となり、そこから独立した牧野省三が等持院内に撮影所を建てる(1921[大正10]年)。やがて1923(大正12)年9月の関東大震災以降、京都の商業映画製作のスタジオが一気に増加する。他方、芝居小屋を上映会場としていた時代から、映画上映を専門とする映画館の登場も同時に生じていた。日本最初の常設映画館とされる電気館(東京・浅草)の誕生は、1903(明治36)年。それ以降、各地に建設が進んだ。京都においても、1908(明治41)2月の電気館(やはり新京極)を始めとして、新京極西陣を中心に多数の映画館が林立する。

だが、本論の目的はこのような映画にあるのではない。美術と映像の接点において、個人の表現者を通して創造される仕事である。以後はそうした実践的を絞っていきたい。扱う項目(人物や団体、出来事など)は以下を予定している。

戦前：「映画随筆」(香野雄吉、清水光)／前衛映画発表会／フランス前衛映画写真展／アマチュア映画の興隆／田中喜次と童映社、JOスタジオ／プロキノ／中井正一、